

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320145

研究課題名(和文) 律令国家の北限支配からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の実態的研究

研究課題名(英文) A Study for the State of Ancient North World Across the Tsugaru Channel: Seen from the Northern Area of the Rule by the Nation under the Ritsuryo Codes

研究代表者

小口 雅史 (OGUCHI, Masashi)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00177198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、律令国家最北の支配拠点である秋田城の性格をまず明らかにし、その秋田城による北方支配や北方世界との交流が、具体的にどのようなもので、どこまで及んだのか、またその一方で北方世界内部のみの、秋田城支配と関わらない交流がどのようなものであったかを検討した。

それによれば、秋田城の北方支配は意外に限定的で、北の領域では北の論理に基づく主体的な流通が優勢であったことが明らかになった。一方秋田城の性格については、文献史料の解釈からは非国府説、出土文字資料の解釈からは国府説が有利であることを確認した。最終的結論は今後の課題としてなお検討を続けたい。

研究成果の概要(英文)：We examined the characteristics of Akitajo, which is the northern rule base of the nation under the Ritsuryo Codes; after that we discussed actual state and influence of the rule for or communication with the northern area and considered commerce which was conducted only inside of the northern world being independent from Akitajo. By this study, we elucidated that the rule for northern area by Akitajo was, contrary to general expectation, limited and subjective commerce based on the logic of the northern world was superior to that of Akitajo. On Akitajo, we showed that it would be not a Kokufu by an interpretation of historical documents and might be a Kokufu as a result of deciphering of unearthed materials. We will continue to examine this subject to come to a conclusion.

研究分野：日本古代中世史、北方史

 キーワード：北方交易・交流 津軽海峡世界 続縄文土器の交流 擦文土器の交流 外来系土器 鉄器の流通経路
 渡嶋世界 北海道出土須恵器

1. 研究開始当初の背景

近年、日本列島内を均一的に扱う従来の「日本史」研究に対する反省として、地域的特色を解明して、列島内における多様な地域文化の存在を示し、「日本」像を見直す研究が活発になってきた。列島の南北両端地域の史的展開過程については、「もう一つの日本」ないし「もう二つの日本」というキャッチフレーズのもと、いわゆる「日本国」の在り方とは異なる特色が徐々に明らかにされつつある。特に中世において「ひのもと」と呼ばれ、名実共に「もう一つの日本」となった北日本の歴史は、多様な「日本史」の存在を考えるとときに無視できない重要な存在である。その性格を端的に表すキーワードが「交易と交流」であって、いわゆる「日本史」において通常基本となる水田の位置付けが極めて低い、米に依存しない世界としての特色が明らかにされつつある。

この地域は津軽海峡によって地理的には大きく二分されているが、この海峡は必ずしも常に「交易と交流」上の障害となっていたわけではない。例えば中世においては、津軽海峡を挟んで対峙する津軽と道南とは、『北の内海世界』(小口他著、山川出版社、1999)と呼ばれる一衣帯水の地域であった。しかしその前史である古代に、常に北東北と北海道とが一つの文化圏を作っていたわけでもないことは、これまでの文献史学や考古学分野での個別研究からうかがえる。北東北と北海道とで共通に出土する土師器・須恵器・続縄文土器・擦文土器あるいは鉄製品の分析からは、交易のために接触する地域が時代によって異なることが個別に指摘されてきた。そしてそこには、おそらく律令国家最北の支配拠点である秋田城の支配が、どこまでどのような形で及んでいたかが密接に関わっているはずである。

もちろん太平洋側の交流ルートも存在するが、当時中心となるのは日本海側の交流ルートである。ところがその秋田城自体について、それを出羽国府と見るか否かで、文献史学・考古学双方を巻き込んだ論争になっていて、日本古代の北方支配方式を考えるための、極めて重要な問題がいまだ決着をみていない。しかし逆に本研究のような視点を取り込めば、北方世界の具体的な支配形態から、秋田城の性格を再考することも十分可能なはずで、長年の論争に終止符を打てる可能性がある。

本研究グループはこれまで後北 C2-D 式期～北大式期(3～7世紀)を中心に、津軽海峡を挟む世界内部での続縄文土器の交流や、文献史料にみえる交易産品の具体像を明らかにしつつある。その成果をベースに新たに須恵器・土師器・擦文土器や鉄その他の産品をも分析の対象として追加し、そこにさらに秋田城を中心とした文献史学の成果を融合させることにより、古代北方世界内部の実像を具体的に描き出し、新たに律令国家の側か

らみた北方支配の具体像をも明らかにすることを目指して、この研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

律令国家の北の境界領域と、そのさらに外に広がる北方世界の実態は、かつて日本列島各地に存在した多様な文化相とその相互関係を、具体的に検討することが可能な貴重な舞台である。

しかし残存する僅かな文献史料から得られる成果と一方での豊富な考古学的成果とのすりあわせ、あるいはその多岐に亘る考古学的成果同士のすりあわせが十分に機能しておらず、曖昧で推測に基づく歴史像しか描かれていないといっても過言ではない。

本研究では7世紀末～10世紀を主対象に、文献史学と考古学との協業によって、律令国家最北の支配拠点である秋田城の北方支配や北方世界との交流が、具体的にどのようなもので、どこまで及んだのか、またその一方で北方世界内部のみの、秋田城支配と関わらない交流がどのようなものであったのかを、時期による変化をも考慮しながら明らかにし、北方世界の具体像を詳細に描き出し、多様な日本像理解のための史資料を提供することを目的とする。

具体的には、秋田城の性格解明、「秋田城下」の支配の具体像の解明、境界領域としての津軽地域の実態解明、北方世界独自の交易圏の解明、鉄器交易圏の解明といった研究目的を設定し、地元の考古学研究者を研究協力者として迎えながら、地域の最新情報を吸収しつつ、上記の目的に迫ることを考えた。

3. 研究の方法

(1) 秋田城の性格解明については、文献及び木簡・漆紙文書その他の出土文字資料を再度精査し、秋田城の有した機能を解明する。また東北各地の他の城柵との構造あるいは出土遺物の比較から、秋田城の有する機能の特殊性を検討する。最終的には秋田城が出羽国府であったかどうかという論争解決についても、一定の目途をつける。

(2) 「秋田城下」の支配の具体像の解明については、幸い元慶の乱関係の文献史料から秋田城近辺の村落について、それぞれ直接の支配下(当時の史料では「秋田城下」)にあったか否かが知られているので、それをふまえながら出土土器の比較分析を行い、集落が「秋田城下」であるか否かを判別する基準を打ち立てる。それを用いて、文献未記載の地域についても、その村落出土の遺物から、そこが「秋田城下」か否かの判断を下し、秋田城の直接の支配地域の広がりや確定して、その支配の実態を具体化していく。

(3) 境界領域としての津軽地域の実態解明については、まず北東北における青森県五所川原産須恵器の分布と器形等について集成

する。ついで北海道における五所川原産須恵器の分布と器形等について悉皆調査し、集成した上で北東北と北海道との関係と比較検討する。北海道においては五所川原産以外の須恵器についても、産地が明らかなのは参考資料として集成していく。

一方、続縄文・擦文土器について、北海道と津軽の関係を時期別に検討する。北海道と津軽の関係が濃密でない時期が明らかになった場合には、秋田城周辺まで比較の対象を拡大して、その両地域の関係の時期別変遷をも解明する。土製支脚等の分析によって、津軽を飛び越えた北海道と秋田との直接的な関係も推測されるからである。

(4) 北方世界独自の交易圏の解明については、秋田城支配下の外の世界には、津軽以外にも地域集団ごとの独自のまとまりがあったことが推測される。特に注目されるのは、近年オホーツク文化との関わりが明らかになった(いわゆる「青苗文化」の中心地でもある)奥尻島である。そこが離島をつなぐ交易圏の重要な結節点である存在の可能性も探る。また道北・道南との相互関係も学界で意見の統一を見ていない。秋田城を中心とした世界とは全く異なる、各地域独自の交易圏の存在を解明する。

(5) 鉄器交易圏の解明については、鉄器は古代の北海道においても必需品であり、その入手経路の解明は北方世界における交易圏を知る上でも重要課題である。津軽では製鉄関連遺跡に擦文土器が共伴する。さらに微量元素分析により北海道と津軽の鉄が同一組成であるという見解もあるが、それに対しては学界で強い批判もある。本研究では、鉄の器形を中心に地域間交流の分析を試みる。小嶋や笹田は東北アジアの鉄器に詳しく、大陸までを見据えた分析を試みる。

以上を踏まえて最終年度に秋田城を舞台に最終総括シンポを企画する。

4. 研究成果

(1) 秋田城の性格については、最終総括シンポでも激論となった。文献史学の立場からすると、従来今泉隆雄氏が力説してきたように、『続日本紀』宝亀 11 年(780)8 月乙卯条の秋田城停廢問題や『日本後紀』延暦 23 年(804)11 月癸巳条の城制の廢止と秋田郡の建置問題を合理的に解釈すれば、秋田城に国府があったとは考えたいことが確認された。また国府説の最大の根拠であった、その出土文字資料に国府関係資料が存在することについては、漆紙文書は移動するという一般的傾向を踏まえて、別な場所にある国府で作成されたものが秋田城に運ばれた可能性を考慮すべきことが論じられた。

一方で国府説からは、漆紙文書が移動することは否定しないが、表裏両面が国府で作成

された文書が明確に存在することから、少なくともそれらの漆紙文書が出土する場所は国府であるという見解が示された。

一方考古学的な城柵ないし国府構造論からは、秋田城が一般的国府に比べて小規模であることが問題提起された。その立地から見ても、対蝦夷政策の最前線に、国府という重要な官衙を置くか疑問視された。ただし渤海使という外交使節を迎えていることを重視して、そこに国府的機能を見出すべきであるという見解も提起された。

以上のように、この大問題は容易に解決しがたいところであるが、本研究によって明確な論点整理と、とくに最大の根拠資料群である一連の秋田城出土文字資料について新しい整理と解釈の可能性が開けたことは重要である。今後の発掘成果の進展とあわせて、新しい秋田城論を展開させるための基盤は構築できた。

(2) 「秋田城下」の支配の具体像、(3) 境界領域としての津軽地域の実態については、「城下」の土器と大館・能代地域の土器の比較、さらには津軽をも含めた地位間交流という視点から、その解明を進めることができた。

これまでも連携研究者の鈴木琢也らの研究によって 8~9 世紀における秋田~北海道間の須恵器流通は明らかにされているが、中間域である津軽沿岸部の状況は不明瞭であった。近年、五月女菴遺跡において日本海沿岸初の 8 世紀代の堅穴建物跡が発見されるなど、当該期の資料蓄積が進んでおり、それらは秋田・津軽・北海道を結ぶ日本海沿岸ルートが存在を裏付けるものととらえられる。9 世紀後葉~10 世紀前葉の地域間関係については、ロクロ整形食膳具の定量的分析から、土器様相の各要素が東西あるいは南北方向へ漸移的に推移することが確認されるとともに、法量平均の関係性から、秋田・津軽・南部・北海道といったグループが見出された。10 世紀中葉以降の地域間交流については、擦文(系)土器や五所川原産須恵器の在り方を巡って、津軽を中心とする北奥と北海道の結びつきの深化がうかがわれるが、それらは令制外地域で完結するように見え、土器様相からは秋田地域との関係性は稀薄と見るべきだという結論に達した。

(4) 上記の(2)(3)の結論とも深く関わるが、秋田城の北方支配は意外に限定的で、それとは関わらない、北方世界独自の交易圏が確実に存在する。秋田城と北海道との関係としては当初、土製支脚の類似性が注目されたが、そもそも土製支脚自体が秋田城内では主体的なものではない。また本研究グループで、北海道根室市で秋田城と関わる海老沢窯産の須恵器と見られるものが出土したことを確認したが、これも 1 点だけの出土で、ただちにその性格を深く追究できる段階ではない。五所川原産須恵器の北海道における流通

も、秋田城の支配下にはなく在地の独自勢力による展開とみるべきだと思われる。

(5)鉄器交易圏と秋田城の関係であるが、秋田城で出土した、一見大陸的な羽釜については、成分分析の結果、国産である可能性が高くなった。ただし形状的には大陸性に近く、大陸性のものをモデルに、いわば「渤海人好み」の羽釜を東北地方で製作した可能性がある。鉄器自体が大陸から渡来した可能性は薄くなったが、しかし文化交流自体は見出せる可能性が残った。ただ北海道の鉄器と秋田城との関係、あるいは大陸との関係については、大陸側の資料がまだ少なく、最終的な結論は得られなかった。今後の課題としたい。ただし古代の北海道の鉄器生産や鉄の流通の実情はある程度明らかにできている。連携研究者の笹田朋孝の研究によって、7世紀には北海道でも利器の鉄器化がほぼ完了していることは明らかであるが、東北と比べて鉄器の生産能力が低かったことや擦文文化よりも道東オホーツク文化の方が鉄器の出土が多いことが示された。

以上の研究を総合して『秋田城と北方支配』という書籍を東京の六一書房から刊行することが内定している。そこでより詳細な研究結果の総括を公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計16件)

①小口 雅史、大高広和書「大宝律令の制定と「蕃」「夷」、法制史研究、査読無、64、2015、315-317

②小嶋 芳孝、「渤海考古学の現状」、横浜ユーラシア文化館紀要、査読無、2、2014、96

③鈴木 琢也、北海道の末期古墳と蕨手刀、『北三陸の蝦夷・蕨手刀』岩手考古学会、査読無、2014、47-54

④L. イシツェレン、笹田 朋孝、炉形に着目した匈奴の鉄生産に関する研究、モンゴル科学アカデミー考古学研究所紀要、査読有、32、2014、253-263

⑤ T. Sasada, Ch. Amartuvshin, Iron Smelting in the Nomadic Empire of Xiongnu in Ancient Mongolia, ISIJinternational, 査読有、54-5、2014、1017-1023
DOI: <http://dx.doi.org/10.2355/isijinternational.54.1017>

⑥小口 雅史、石江遺跡群の歴史的背景とその展開、『石江遺跡群発掘調査報告書-石江土地区画整理事業に伴う発掘調査-』、査読

無、2014、265-274

⑦熊谷 公男、出羽国飽海郡と蚶形駅家の成立をめぐる、東北学院大学論集 歴史と文化、査読無、52、2014、1-23

⑧鈴木 琢也、擦文文化にシャマニズムを探る-擦文文化の儀礼-、『シャマニズムの淵源を探る』、査読無、2014、141-174

⑨熊谷 公男、秋田城の成立・展開とその特質、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、179、2013、229-266

⑩天野 哲也、赤沼 英男、Kharinskiy Artur V, Study on the production region of iron goods and the roots of forging technology of the Okhotsk Culture, Bulletin of the Hokkaido University Museum, 査読有、6、2013、1-17
DOI:http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/item.php?item=61135&handle=2115_52575&jname=268&vname=5184

⑪荒木 志伸、城輪柵からみた秋田城-政庁遺構の比較検討から-、秋田考古学、査読有、57、2013、57-70

⑫小野 裕子、オホーツク文化-その形成・展開・消滅を辿る(在地文化との関わりを視野に)、『縄文人はどこへいったか?』、査読無、2、2013、120-159

⑬天野 哲也、Study on the production region of iron goods and the roots of forging technology of the Okhotsk Culture, 北海道大学総合博物館研究報告、査読無、6、2013、1-17

⑭鈴木 琢也、北海道における3~9世紀の土壙墓と末期古墳、北方島文化研究、査読有、10、2012、1-40

⑮熊谷 公男、秋田城と城制、『日本古代の地域社会と周縁』、査読無、2012、233-256

⑯小嶋 芳孝、渤海の交通路、『古代東アジアの道路と交通』、査読無、2011、211-232

[学会発表] (計16件)

①小口 雅史、出土文字資料からみた秋田城、総括シンポジウム「北方世界と秋田城」、2014年12月27日~28日、秋田市中央公民館サンパル秋田(秋田県・秋田市)

②天野 哲也、古代北海道の鉄器・鉄製品と秋田城、総括シンポジウム「北方世界と秋田城」、2014年12月27日~28日、秋田市中央公民館サンパル秋田(秋田県・秋田市)

③熊谷 公男、秋田城の歴史的展開、総括シンポジウム「北方世界と秋田城」、2014年12月27日～28日、秋田市中央公民館サンパル秋田（秋田県・秋田市）

④小嶋 芳孝、秋田城出土の羽釜から見る古代の東北と大陸、総括シンポジウム「北方世界と秋田城」、2014年12月27日～28日、秋田市中央公民館サンパル秋田（秋田県・秋田市）

⑤鈴木 琢也、須恵器からみた古代の北海道と秋田、総括シンポジウム「北方世界と秋田城」、2014年12月27日～28日、秋田市中央公民館サンパル秋田（秋田県・秋田市）

⑥鈴木 琢也、古代北海道と秋田の交流、第29回国民文化祭・あきた2014シンポジウム、2014年10月12日、秋田市文化会館（秋田県・秋田市）

⑦熊谷 公男、古代出羽国の建郡と諸郡の郡域—とくに出羽・田川・飽海3郡を中心に—、西村山地域史研究会講演、2014年9月20日、寒河江市文化センター（秋田県・寒河江市）

⑧鈴木 琢也、恵庭出土の古代本州産須恵器、カリンバ土曜講座研究会、2014年7月5日、恵庭市郷土資料館（北海道・恵庭市）

⑨笹田 朋孝、朝鮮半島／韓半島初期鉄器文化の日本列島における受容と展開、瀬戸内海考古学研究会第4回公開大会、2014年5月10日、愛媛大学（愛媛県・松山市）

⑩笹田 朋孝、遊牧社会匈奴の初期鉄器、嶺南大学校文化人類学科 2015年国際学術セミナー「農耕と非農耕地域の鉄（鉄器）文化比較」、2014年3月9日、慶尚北道慶山市（大韓民国）

⑪天野 哲也、Complicated consequences - overkilling of Brown Bear as a special local product of the Okhotsk culture: Comparative study of bear rituals and ceremonies between East and West Eurasia、ABSTRACTS 19th Annual Meeting of the European Association of Archaeologists、2013年9月7日、Pilsen(Czech Republic)

⑫小嶋 芳孝、渤海における五京制の諸問題—旧国に関して、国際シンポジウム「ロシア極東における中世考古学—その課題と歴史文化遺産の保護」、2013年9月20日-21日、ウラジオストク（ロシア共和国）

⑬小嶋 芳孝、渤海考古学の現状、ユーラシア研究会、2013年7月26日、横浜ユーラシア文化館（神奈川県・横浜市）

⑭荒木 志伸、在地勢力の台頭—清原氏前史の横手盆地—、後三年合戦金沢柵公開講座、2012年3月18日、まなびおん美郷（秋田県・横手市）

⑮笹田 朋孝、漢代鑄造鉄器の周辺地域における展開、愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第4回国際シンポジウム『戦国燕系鉄器の特質と韓半島の初期鉄器文化』、2011年10月29日、愛媛大学（愛媛県・松山市）

⑯鈴木 琢也、北海道における7～9世紀の土器の特性と器種組成様式、北方島文化研究会第39回研究会、2011年9月17日、北海道厚沢部町図書館（北海道・厚沢部町）

〔図書〕（計2件）

①笹田 朋孝、北海道出版企画センター、『北海道における鉄文化の考古学的研究』、2013、pp183

②小口 雅史編、高志書院、『海峡と古代蝦夷』、2011、pp299

〔その他〕

<http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/277/Default.asp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小口 雅史 (OGUCHI, Masashi)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：00177198

(2) 研究分担者

熊谷 公男 (KUMAGAI, Kimio)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：70153343

天野 哲也 (AMANO, Tetsuya)
北海道大学・総合博物館・資料部研究員
研究者番号：90125279

(3) 連携研究者

小嶋 芳孝 (KOJIMA, Yoshitaka)
金沢学院大学・文学部・教授
研究者番号：10410367

小野 裕子 (ONO, Hiroko)
北海道大学・総合博物館・資料部研究員
研究者番号：80400034

荒木 志伸 (ARAKI, Shinobu)
山形大学・基盤教育院・准教授
研究者番号：10326754

鈴木 琢也 (SUZUKI, Takuya)
北海道開拓記念館・学芸部・研究員
研究者番号：40342729

笹田 朋孝 (SASADA, Tomotaka)
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：90508764